






研究者名※	遠藤 康裕 ENDO YASUHIRO	学位※	社会福祉学 修士
所属※	人間社会学部 社会福祉学科	職名※	助教
連絡先	endoy@fc.jwu.ac.jp		
URL	http://www.		
researchmap※	https://researchmap.jp/yshr-endo		
研究分野※	社会福祉学、社会学		
研究キーワード※	貧困・公的扶助、社会保障・社会福祉政策		
共同研究・競争的資金等の研究課題	なし		
社会貢献・産学官連携活動等	<ul style="list-style-type: none"> ・2013年6月7日 首都大学東京オープンユニバーシティ講座「若者と社会保障制度」『若者支援を考える』第4回講師 ・2014年6月13日 首都大学東京オープンユニバーシティ講座「若者を社会保障に結びつけるには」『若者支援をどう理解し、どう支援するか』第5回講師 ・2014年6月～2015年3月 「ホームレス自立支援センターにおける就労支援の在り方に関する調査研究事業」検討委員会ワーキングチーム ・2017年9月23日ミニ講演「若者支援と社会保障」講師・助言者『国民年金学習フォーラム』@アルカス SASEBOイベントホール 		
受賞歴	なし		

研究領域	路上生活者、居住地移動、愛着 貧困・公的扶助、社会保障・社会福祉政策	(SDGs)	   
研究テーマ※	路上生活者の居住地移動と愛着に関する研究		
概要※ (概ね1000字以内) (写真・グラフ等自由)	<p>【研究の背景・目的・内容】</p> <p>路上生活者の居住地移動を含めた生活歴について、東京都A区と東京都B市(多摩地域)でのインタビュー調査を行った。</p> <p>その結果、A区にある支援団体に関わりのある路上生活者の出身地は全国に広がっているのに対して、B市にある支援団体に関わりのある路上生活者の出身地は比較的多摩地域が多く見受けられた。</p> <p>路上生活者が集まる要因として、周辺部と比較してカネを稼ぐ手段へのアクセス、生活できる環境・インフラがある、それらを含めた利便性が高いことが考えられるが、そうであるならば、B市や多摩地域に留まるのではなく、仕事や充実したインフラを求めてA区のような都心部に行くのではないかという疑問が生じる。</p> <p>筆者はその理由を彼らが土地・地域に対してなんらかの愛着を抱いて移動・滞留を行っているためではないかと考えている。そこで居住地移動の際に土地・地域に対する愛着が影響を与えているかの検討を試みた。</p> <p>・本研究では路上生活者へのインタビューの中からその土地での生活、印象と職業、人間関係を抽出し、地域への愛着と捉える手法を用いた。</p> <p>・結論から言えば、居住地の地域移動において愛着が影響を与えていたとする明確な語りは見いだせなかった。少なくともB市ないし多摩地域に愛着があるために都心部へ移動しないかどうかまでは分からなかった。とはいえ、移動「後」に獲得したと考えられる愛着は確認することができた。物理的な居住地そのものへの愛着だけでなく、近隣住民や支援団体など社会的な関係性の中で生まれたと考えられる愛着について語られたことの意味は小さくないだろう。本研究での検討のみをもって、「居住地の移動に愛着がなんらかの影響を及ぼしている」可能性を否定することはできずと考えており、今後の課題としたい。</p> <p>・初職就職に伴う居住地移動は、多摩地域生まれかどうかにかかわらず、居住地への愛着というよりは職場の場所に左右されて移動しているように見受けられた。ただ、彼らの語りからは、職場の選択も遠くの大都市よりは出身地近くのつながりを利用しているようにも見受けられた。</p> <p>初職転職後の移動については多様な移動パターンが語られた。多摩地域での移動を見ると、単にB市の交通インフラを頼みにした移動や、愛着が地域への定着に繋がらなかったと見える語りがあった。また、「溜め」のなさによる生活の不安定化・路上生活化やそれまでに築いた人間関係などによって移動が促され、またその移動も将来的な展望に立ったものではなく、「なじみ」や「土地勘」といったものに頼った近視眼的な移動になっている語りも見いだせた。多摩地域外での移動は、職業生活の中での移動、親や親族との関係悪化による路上生活化、</p>		

	<p>路上生活化後は利用できる資源の豊富な土地を目指して移動していると語りがみられた。</p> <p>【応用例、研究の展望】 居住地移動への愛着の影響、都市の規模との関連について</p> <p>【研究方法の特色】 路上生活者へのインタビュー、およびインタビュー内容からの居住地への愛着の析出</p>
<p>本研究関連 特許・論文等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・2017年3月「第1章 路上生活者の住居変遷からみた生活保障の仕組み」法政大学社会学部『2016年度 政策研究実習報告書 東京都下の路上生活者の生活と排除の諸相に関する調査研究』pp.33-45 ・2018年3月「第1章 職業・居住の移動から見た路上生活者」法政大学社会学部『2017年度 政策研究実習報告書 東京都下の路上生活者の生活と排除の諸相に関する調査研究Ⅱ』pp.37-50 ・2019年3月「第1章 路上生活者の職業・居住地移動」第2章 路上生活者の居住地移動と愛着に関する一考察」法政大学社会学部『2018年度 政策研究実習報告書 東京都下の路上生活者の生活と排除の諸相に関する調査研究Ⅲ』pp.39-52、53-67 ・2022年3月「第1章 路上生活者の職業・居住地移動Ⅱ～多摩地域調査を題材に～」法政大学社会学部『2021年度 社会調査実習報告書 東京都下の路上生活経験者・生活困窮者の生活および支援の諸相に関する調査研究』pp.19-30
<p>共同研究・外部機関 との連携への期待</p>	<p>・路上生活者は減少しているとの報道がされていますが、路上と不安定住居(たとえばネットカフェ、さまざまな施設、友人・知人宅などなど)との間を行き来する層が多数存在しており、問題は解決していません。また、路上生活者と不安定居住者は別々に政策対象とされており、両者を一体的に捉え居住と生存の問題を解決していく必要があると考えます。</p>